衡陽の女たちは

南岳山門付近で乗り込んだミニバス（四元）は衡陽汽車西站とは違う何やら大きな百貨大楼（百貨店）のような建物の前広場に到着した。五月一六日（日）、の正午頃。雨上がりの衡陽はまだ厚い雲に覆われていた。

見覚えのある場所ではなかったので、僕は本当に衡陽なのかと少し心配になる。もしかしたら違う街に行くミニバスに乗ってしまったのではないかと。

しばらく大通りを歩き、地図と大通りの名前の表示を見比べて、ようやく、自分はたぶん今ここにいるのだろうと推測する。とすれば、汽車站へ行くためにはたぶんこっちの方向でいいのだろう。

衡陽という街に再び戻ってきた僕がまず汽車站をめざしたのは、もちろん鄧桂元という宿の客引きをしていた女性との口純束（筆淡約束）があったからだ。大きな荷物は駅の小件寄存処に預けて、ただ今の僕は宿無し状態なのだ。ともかく宿を決めてあとのことは、そのあとのことだ。

僕は汽車站をめざして環城北路から解放路を汽車站の方へ歩いた。彼女は汽車站の售票処で一昨日の夕方のように客待ちをしているだろうか、と胸がざわついた。僕は宿の場所を知らなかったので、ひとりで行くわけにはいかないのだ。しかし、それよりも何よりも、僕は彼女に会いたかった。南岳でこてんぱんな目にあったこともあるだろう。ひとりぼっちで旅行を続けていて、寂しくなっていたこともあっただろう。なんだか手触りのない薄闇の中で遠い微かな明かりを求めているようだった。まるで見知らぬ街の、ただひとりの知人にでも会いに行くかのような心のざわつきを抱えて、僕は歩いていた。

途中大通りから少し入ったところにあった公衆便所で大便をした。便所の前に座っていた管理人に二角（小便は一角）を支払い、便所紙を受け取って中に入っていく。大便の場所は数ヶ所が並び、隣どうしは腰くらいの高さの壁で区切られているが、それだけだ。もちろん扉などは一切ない。壁に背中を向けて便器をまたぐと、前方は小便の場所。公衆便所で大便をするのは初めてのことだったので（ホテルなどではもちろん個室だ）、たまたま人がいなかったのを幸いに、そそくさと用を足した。

見覚えのある街角に至り、見覚えのある汽車站にたどり着いたが、彼女はいなかった。

何の根拠もないのだけれども、僕は当然のこと彼女が汽車站の售票処にいて客待ちをしているものだとばかり思い込んでいたので、ちょっと

ショックだった。彼女の紹介してくれた宿、迎興旅社の場所は聞いていなかったので、彼女と会えなければ話にはならない。

しばらく付近をぶらついて捜したが、彼女の姿はどこにも見えなかった。仕方なく僕は歩き始めた。とにかく宿を確保しなければならないのだが、一昨日の廻雁賓館にもう一度泊まる気にはなれなかった。ちょっと用事（トラベラーズチェックを人民元に両替すること）をすませて、それからもう一度戻ってくることにした。それでも彼女に会えなければ、あきらめて廻雁賓館に泊まることにしよう。

両替のためには銀行を捜さなければならないのだけれども、簡単な地図には銀行は載っていない。とりあえず市政府のある繁華街の方へ行ってみることにした。

途中に大きなホテルがあったので、ロビーを覗いてみたが（外国人用のホテルには中国銀行のカウンターがあることもある）中国人用のホテルらしくて、銀行はなかった。

しばらく歩いていると、百貨大楼の向こうにちらりと中国銀行の看板が見えた。「やったあ！」と思いながら覗いてみると、とても小さな支所で、窓口の向こうには二、三人の服務員がいるだけだった。客はひとり、ふたり。

本当に両替ができるのかなと思いながら尋ねてみると、今日はダメだけれども、明日なら両替できるという服務員の答え。それを聞いて初めて、僕は今日が日曜日だということに気付いたのだった。ちょっとがっかりして銀行を出ていくと、女性が声をかけてきた。女性というよりも、女の子という言葉の方がふさわしいような年格好の女の子たち数人が僕を取り囲んで、口々に何事か声をかける。

すぐに「チェンジマネー」だということは分かったのだけれども、あいにくＦＥＣはもうあまり残っていなかったし、もしも廻雁賓館に泊まることになればＦＥＣが必要なので、

「我没有銭、没有銭」

と繰り返して断ったのだけれども、女の子のひとりはどうしても離そうとはしないのだ。

「一〇〇元だけ。一三〇元でどう？（もちろん中国語）」

「ＦＥＣはないよ。明日、旅行支票（トラベラーズチェック）を換金したら、チェンジマネーしよう」

「ＦＥＣがなかったら香港ドルは？」

「ないよ、悪いけど」

「それじゃ、日元は？」

考えてみれば、トラベラーズチェックの他に日本円を一〇万円持っていた。それを使って、とりあえず人民幣だけでも補給しておこうか。
「ねえ、交換してよ。七〇〇元。いいでしょ？」
レートが悪くないと思われたし、まるでじゃれあっているような言葉のやり取りが心地良かったので、交換した。
突然金持ちになったような、ふと足もとをすくわれそうな、微かな不安と心もとなさが頭を過ぎった。
人民幣をポケットにしまって、さて歩き始めようとすると、彼女は、
「あと一万円。いいでしょ？」
と繰り返して、しつこくくいさがってくる。
「明天、明天（明日）」
「我換銭旅行支票、日元。明天換銭人民幣」
わけの分からない中国語を投げかけながら、僕は彼女を振り切った。
振り返ると、
「また明日ね」
と笑いながら、彼女は手を上げた。

市政府前のバス停からバスに乗って汽車站へと戻った。
昨夜（と言うよりも今朝）は二時間ほどしか眠っていなかったし、衡陽に戻ってからもかなりの距離を歩いたので、少し疲れていた。早くゆっくりと休みたかったので、祈るような気持ちだった。
「どうか彼女がいますように」
やがて終点、汽車站着。
乗客たちに押されるようにして下車し、通りを隔てた售票処の方を見てみると、見覚えのあるジーンズをはいた女性が目について、何故か僕は胸がどきりとする。

鄧桂元が立っている。仕事仲間のもうひとりの女性と一緒に。すこし裏寂しい感じのする汽車站售票処の入口で。バスの到着時間の合間なのだろう。何をするということもなく、手持ちぶさたに売店の人に話しかけたり、ぶらぶらと行ったり来たりしながら。
僕はなにげない様子で近づいていく。まるでどこかの駅で女友達と待合せでもしているかのように。そっと彼女のうしろから近づいて、トントンと肩を叩いた。
一瞬驚いたような彼女の顔がほころぶ。
「あら、来たの？」
と言葉を投げかけながら、心得たように迎興旅社へと僕を案内する。

汽車站前の泥だらけのロータリーを渡り、そこから伸びる道路を少し入っていった所に迎興旅社はあった。
歩道に面した入口に小さな帳場があり、旅社の主人らしい男が座っていた。
日本人でも泊まれるのかどうか心配していたのだけれども、彼女が何事かを告げると、心得たように主人は宿泊カードを差し出して、記入するようにと言う。物珍しそうに、パスポートをバラバラとめくっては眺めていた。
宿泊料は三〇元．部屋の鍵を受け取って、鄧桂元の案内で、二階の部屋（ツイン）に入ると、僕は倒れるように横になった。彼女は再び客引きに出ていき、僕は眠った。おそらくこの旅社で一番の部屋なのだろうけれども、壁の上部は隣と筒抜けになっていて、隣のテレビがやかましかった。

しばらくして宿の人が食事の注文を取りにきた。宿の一階は小さな食堂になっていて、部屋まで運んでくれるらしい。
しばらくまともな飯を食べていないので、久しぶりにたっぷりと食べた。炒鶏塊、善魚、三鮮湯、啤酒とごはんで、合計二二元。
ぼんやりとテレビを見ながら夕食を食べていると、鄧桂元が部屋を覗いて、入ってきた。
『現在吃飯吗？（ごはんを食べているのですか）』
『要不要添飯（お代わりはいりませんか）』
『不要（いりません）』
『電視听得懂吗？（テレビは分かりますか）』
おそらく仕事の合間だったのだろう。しばらく筆談を交わしたあと、またそそくさと出ていった。

満腹して、このまま休んでしまおうかとも思ったのだけれども、「あとひと仕事」と考えて、部屋を出た。
廊下の両側にはそれぞれ三室くらいの部屋が並び、廊下のはずれにはお世辞にもきれいとは言えないトイレ（大便は扉なし）。トイレの脇に洗操室（シャワー室）があり、どのようになっているのかと中を覗いたが、何もないのだ。コンクリートの地肌をさらした小部屋には裸電球と水道の蛇口があるだけ。
今にも再び雨が降り出しそうな、どんよりとした肌寒い日だったので、水道水で体を洗う気にはなれなかった。

宿の主人に身振りを交えながら、
「洗操（シーツァオ）。我想洗操」
と繰り返すと、初めは散髪屋を捜していると勘違いした主人にもようやく意が通じた。
主人は食堂の調理場で働いていた女性に声をかけた。しばらくして、主人は大きな鉄鍋に一杯のお湯を洗操室に運んできて、電球を点灯し、
「さあ、どうぞ」
というように中国式のバスルームに僕を招く。

いつのまにか、僕は眠ってしまった。夕食も食べて、休も洗ってさっぱりとして、テレビをぼんやりと眺めながらベッドに横になっているあいだに。
ドカドカと何者かが眠りに踏み込む感じがして、眠りから引き戻された。寝ぼけながら体を起こすと、鄧桂元と同僚の女性だった。
彼女はつかつかとテーブルに歩み寄ると、何事かを書きつけて、目の前に差し出すのだった。
『晩上睡覚把門関好（寝るときは鍵をかけておきなさい）』
寝ぼけから覚める間もなく、二人は出ていった。

※　※

五月一六日（月）午後三時過ぎ。
石鼓公園にいる。
今日は一日雨が降り続き、衡陽は降りしきる雨の中だ。
ここ石鼓公園は衡陽を南北に貫く湘江とその支流蒸水が合流するところで、川の流れに角のように突き出した格好になっていて、湘江の両岸を遠く大橋の方まで見はるかすことができる。
雨は今も降り続いていて、遠景は雨に煙っている。ぼんやりと見える大橋の彼方には、遠く背の高いビルディングの影が微かに見える。
岸辺の向こうには低い街並が横たわり、所々に首を突き出した煙突は灰色の煙を吐き出している。
船着場も雨に濡れて、その黒い屋根は岸辺にしがみついた黒いねずみの背のようだ。
一艘の小舟が黄土色の流れを渡っていく。ここ数日の雨で増水した湘江の流れは意外に速く、小舟は木の葉のように流されながら川を渡っていく。
ひとり櫓を漕ぐ船頭の雨ガッパ姿が次第に小さくなっていく。

僕はひとり、人気のない石鼓公園にいて、〈寂しさ〉のことを考えていた。

〈寂しさ〉はどこから来るのだろう。僕が寂しいのだろうか、それとも情景が寂しいのか。〈寂しさ〉はただ今の僕の感傷に過ぎないのか、それともそれは実在するのだろうか。あるいは、それはつまらないものか、それとも語るにたる確かなもの、確かな現実なのだろうか。

※

今朝目覚めて、漠然と今後のことを考えていたときには、僕は今晩の夜行で桂林に向けて出発するつもりでいた。衡陽発二一：四五、桂林着六：〇八、二一三次。昨日の銀行で両替をして、チケットを手に入れるために火車站へ行こう。夜までは時間があるから、たっぷりと衡陽の街を見て回ることができる。

漠然とそのように計画を立てて、それでも雨の街に出ていくふんぎりがつかないでぐずぐずしていると、トントンと扉を叩いて、鄧桂元が入ってきた。

心得たようにテーブルのノートを取り上げて、筆談を始めた。

『你今天在我们这里、别走了（今日も泊まって。行かないで）』

『我想出発今天晩上二一点（今晩九時に出発するつもりです）』

『你今天去哪里（どこへ行くのですか）』

「桂林」

『你今天去桂林。明天到哪去（今日桂林へ行って、明日は？）』

『什么時候返回衡陽呢（いつ衡陽に戻りますか）』

『你们那里好吗？（あなたのところはいいところですか）』

『為什吗不結婚呢（どうして結婚しないのですか）』

僕は言葉を見つけることができず、どのようにして答えたらいいのか分からない。

『今天别去了（行かないで）』

『在我们这里很開心（好玩）的（ここはとてもいいとろです）』

『今天去雁峰公園、别去桂林』

思わず僕はうなずくのだった。もとより彼女の言葉の意味するところを僕は理解することができない。心からの言葉なのか、客を引き止める言葉なのか、僕には分からない。しかし『别去（行かないで）』と言われて、それを振り切って今晩出発するということの理由もまた僕にはないのだった。

『你的工作是什吗（あなたの仕事は何ですか）』
『食品公司』
『你有照相機吗？（カメラは持っていますか）』
『你有多少假期吗？（休みはどのくらいありますか）』

雨の街に足を踏み出した。一路の路線バスに乗って、昨日の中国銀行の支所へと向かう。
支所の入口には昨日のように「チェンジマネー」の女の子たちがたむろし、歩道を歩いてくる僕の姿を見つけると、「また会ったね」というように笑いかけてくるのだった。
窓口にしばらく並んで、服務員に両替してほしいことを告げると、彼は他の服務員と相淡したあと、
「ここでは両替できないから、ここへ行きなさい」
と言いながら、住所をメモして差し出した。
ボールペンの筆記文字は一見して読みづらく、住所だけでは行けそうにもないので、当惑しながら支所を出ていくと、昨日の女の子が、
「両替、両替」というように付きまとってくる。
「ここではダメらしい」
と言いながら、さっきのメモを差し出すと、女の子たちはメモを覗き込んで、「あーだ、こーだ」とわいわいやり始めた。しばらくして昨日の女の子が提案した。
「一万円を両替してくれたら、案内してあげる」
かなりの大金だし、人民幣ばかりを手に入れても仕方がないので、しばらく躊躇していると、どこから来たのか女の子たちの親分のような女性が、
「私が証人だ。きちんと案内する」
というようにあいだに入るのだった。
何かちょっと違うような気がしたけれども、「まあ、いいか」と思って、一万円を七〇〇元と交換した。
女親分と昨日の女の子は連れ立って、一〇分ほど離れた中国銀行の支店へと僕を案内した。
女親分は窓口の服務員に確認し、窓口を確かめたあと、僕を手招く。
「今度はＦＥＣを両替しよう」
と言う女の子を制して、いつのまにか消えた。たぶん闇両替を見咎められることを恐れたのだろうと思う。

市政府前からバスに乗って、湘江を渡り、火車站へ。

腹が減っていたので、駅前の食堂で肉のたっぷり入ったラーメン（四元）を食べてから、気合を入れて售票処に向かった。

二一七次、明日九時五三分発、桂林行き。三日前ここに並んだときには、当日券しか売っていないというようなことを服務員に言われたので、ちょっと心配だった。明日の朝発なのだから当日券のようなものだ、とは考えたのだけれども。

行列は遅々として進まず、時間ばかりが過ぎていく。人々はただひたすら立ちつづけ、待ちつづけている。だがそれは忍耐ということとは少し違うという気がする。忍耐として理解すれば簡単なのだけれども、もう少し中国とか中国人ということの深いところに関わっているような気がする。それを僕はうまく言えないのだけれども。

列の前に並んでいた青年が「日本人か？」と話しかけてきた。

「日本人なら行列に並ばなくてもいいのに」とか

「桂林行きなら、明日の列車の前に今晩の列車がある」とかいろいろ教えようとしてくれる。

「謝々」

と僕は答えながら、楽に、早く、目的に達すること、そのこと自体には何の意味もないと考えていた。手段と目的との無限連鎖、その循環の中に回転する暮らしというものをいったん抜け出すということ、目的というものをいったん消去すること、そこからしか僕の旅は始められない。

ようやく窓口に到着し、僕は大声で行き先を告げる．無言でチケットとおつりが投げ返される。いつものことだ。

五月一八日、二一七次。一七元。九：五三衡陽発、一六：五九桂林着。硬座六号車一一〇座。

降りしきる雨の中を雁峰公園へ行ってみた。

湘江を東岸に渡った所でバスを降り、簡単な地図を頼りに歩いていくと雁峰公園はすぐに見つかった。公園前広場にはほとんど客らしい人影はなく、何人かの写真屋たちだけが暇そうにしていた。南岳でのできごとを思い出して、写真屋につかまらないようにとそそくさと通り過ぎ、五角の入場料を払って公園内へ入っていった。

入場門を入っていくと、すぐに茶色い巨石が立ちはだかり、見上げると『廻雁蜂』の文字が刻まれている。巨石の背後には寺院の屋根が覗いていた。

巨石の脇から石階段を登ると寺院の前に至り、そこからさらに階段や小道を登っていくと、遊技場や茶園や庭園があったが、それだけだ。『今天去雁峰公園、別去桂林』のわりにはたいしたことはない。だけれども、

ほとんど誰もいない公園は静かで、售票処の混雑を抜け出したあとだったので、ほっとして僕は静けさに腰を下ろし、降りしきる雨を眺めた。

廻雁峰の、小高い丘というほどの高さから眺めると、茶色や黒の三角屋根は雨に濡れて、衡陽の街並はきらびやかでも華やかでもないけれども、とても落ち着いた印象を与えた。

雁峰公園でしばらく休憩したあと、石鼓公園へと向かった。廻雁公園は衡陽の南端にあり、石鼓公園は北端。湘江東岸沿いに南から北へと衡陽の街を縦断することになる。この縦断路は中山南路、北路と名付けられていて、衡陽の繁華街になっている。

雨が降り続いていたのでどこか寂しい印象を漂わせた繁華街は、それでも百貨大楼や様々な商店が並んで、賑やかだった。

途中のバス停でバスに乗るつもりだったのだけれども、うまい具合に見つからなかったので、そのまま一時間ほど中山路を歩いて、ようやく石鼓公園着。

石鼓公園は湘江とその支流蒸水との合流点に位置し、角のように突き出した先端に山というよりも島という感じの石鼓山があり、そのふもとに石鼓書院がある。

雨が降っていたからか、ここにも人影はほとんどなくて、ひっそりとしていた。

チケット売場の女性は退屈そうにしていた。

改築中らしくて、石鼓書院は閉ざされてあちらこちらに建築資材が無造作に置かれていた。

掃除夫のおじいさんは黙々とホースで水を流していた。

石鼓書院の脇道を通って、石鼓山の裏側、湘江を一望できる場所に腰を下ろした。

降りしきる雨に増水した湘江は黄色い流れを運び、遠景は雨に煙っていた。降りしきる雨音だけがフィルターのように情景を覆っていた。

※

旅をするということ、それはたぶん〈寂しさ〉が僕という一点に局所化されるということだ。

普段の暮らしにおいて、僕たちは自分自身が〈寂しさ〉であるということを意識するということはほとんどない。それはたぶん〈寂しさ〉と〈寂しさ〉が重なりあい、あるいは共鳴したり反響したりしあって、漠然と溶け合った状態にあり、あるいは〈寂しさ〉と〈寂しさ〉のコミュニケーシ

ョンは制度化され、あらかじめ約束されているからだ。

コミュニケーションは手段であり、手段としてのコミュニケーションは必ず目的の固定化を含む。つまり伝えるべき何事かがある程度確定して初めて手段としてのコミュニケーションは成立する。伝えるべき何事かはどのようにして確定するのだろうか。おそらく伝達者と被伝達者との間に関係が確定することによってだ。関係の確定とは、人と人とがなんらかの社会的な関係（役割）としてお互いを認め、また自らを認めるということだろう。

旅をするということ．それは社会的な関係の総体としての自分というものをいったん止めるということだ。住み慣れた暮らしや街を離れて、言葉も習慣も異なる国を旅するとき、それまで漠然と僕のまわりに張り巡らされていた（アタリマエすぎてすでに生理と化してしまった）コミュニケーションの網の目や暮らしの習慣は切断され、僕という一点に途切れる。

そのとき、僕は自らが一個の〈寂しさ〉であるということを知る。それは、これまで疑うことのなかった文化的な取り決めやそれ抜きには自分自身であることはできないと信じきっていた事柄が自分という一点にしか通用しないという驚きであるとともに、一方では逆にこれまで心のどこかでばかにしていた暮らしというもの、暮らしにあくせくとしてただそれだけという暮らしというもの、いわば僕という一点の内部に寸断されたすべてに対するいとおしさの感覚でもある。

そしてまた一方、僕が一個の〈寂しさ〉であるとき、それに反響して一個の〈寂しさ〉としての中国が、衡陽が見えてくるのだ。

僕が日本人として日本のばかばかしい文化をまじめにいとおしく生きているように、中国人たちは中国のばかばかしい文化をまじめにいとおしく生きていた。日本人であれ、中国人であれ、他の何人であっても、自分の属する文化が唯一絶対であると思うことほどばかばかしいことはないのだが、また一方で自分の属する文化をばかにして自分ひとりだけが暮らしの文化というものを超越して普遍に達していると考えることもまたばかばかしいことなのだ。文化は身体なのだ。僕がそれを生きるしかないように、中国人たちもそれを生きている。

一個の〈寂しさ〉としての僕とは何だろう。それをひとことで言い当てることは今の僕にはできない。だがさしあたってのこととして、それを身体のない視線と呼んでみよう。それは自らの出自から断ち切れて、漂泊する視線。無に近く、価値の意識を持たず、また見ない視線なのだ。何故なら、見ることは解釈すること、理解しようとすること、したがって対象を

頭の中に取り入れて、頭の中で分解し構成しようとすることだからだ。身体のない視線は客観的ということとはまったく違う。

身体のない視線は寂しい。何故ならそれは〈存在〉をこぼれ落ちているからだ。〈存在〉をはぐれてどこまでも漂泊し、〈存在〉を郷愁する。身体のない視線が対面する〈存在〉は〈寂しさ〉のオーラに溶け入り、あるいは淡く輝いている。身体のない視線が寂しいということと、〈存在〉が寂しいということとは、たぶん同じ事柄の裏表なのだろう。身体のない視線が両方向に延長して、一方に〈存在〉が、もう一方に視線の内部（言葉、思考）が実体化するのだ。そのようにして〈存在〉は存在し、視線は言葉や思考という身体を手に入れる。

僕たちは言葉による思考によって〈存在〉との一致を探察し、ある場合には〈存在〉を操作し、その操作可能性（あるいは再現性）によって自らの思考に対して客観的という形容をつける。操作可能性（あるいは再現性）を客観と名付けることには異議はない。しかしそれは思考と〈存在〉との一致とは何の関係もないことを知らなければならない。それらは両方向に実体化されてきたものであって、あらかじめ〈存在〉が存在し、思考が存在に近づくというものではないからだ。

あなたは哲学者ではないからこんな話は関係がないと言うかもしれない。だが僕たちは科学とか客観とかいう言葉を使わないままに、操作可能性の日常世界にいる。そこでは人は役割によって人である。人が分かるとはどういうことだろうか．ある言葉に対してある言葉が返ってくることによってである。そのとき僕たちは返答の言葉をあらかじめ予測し、その一致あるいはそのズレによってその人を理解する。入力と出力を見ることによってブラックボックスの内部を理解するのだ。そのようにして僕たちはある言葉がその人に対してどのような反応をもたらすかを理解する。言葉はそのようにして修得され、そのような修得によってコミュニケーションは成立する。そして僕たちはその人、その〈存在〉を理解したかのように思い込むのだ。だがコミュニケーションが成立することとその人、その〈存在〉を理解するということとは別問題なのだ。

だがもちろんコミュニケーションを否定することはない。それは不可避なのだ。大切なことは不可避であることと、それが実体的固定的なシステムであるということとは別の事柄だということだ。コミュニケーションはつねに操作可能性の日常世界を越えようとしている。僕たちはつねに、社会的関係（役割）の総体として客体化されたその人の向う側に、その人そのもの、いわば本当のその人というものを見ようとしている。本当のその人というものが実在するのかどうかは問題ではない。問題はそのようにして言葉というものは水平的な言葉の交換ということを超え出る

次元（そのことを僕はこの旅行記の最初に、垂直的な次元、沈黙、モノローグとして言い表わそうとした。）を必ず持っているということだ。言葉はあらかじめあるその人、その（存在）を理解し、言い表わすのではなく、むしろその人、その〈存在〉を生成するのだ。

見知らぬ土地を旅するということ、なじみ深い文化が僕という一点に寸断されるということ、〈寂しさ〉が僕という一点に局所化されるということ、それは身体のない視線として漂泊するということと似ている。

僕は一個の〈寂しさ〉として石鼓山から雨の湘江、雨の衡陽を眺めていた。その情景は限りなくいとおしく、また限りなく寂しいものだった。

すべての情景、すべての存在は寂しく、僕は一個の〈寂しさ〉として〈寂しさ〉のただ中を漂っていった。

※

いつのまにか雨は小降りになり、雨は上がり、僕は衡陽の繁華街、中山北路を歩いた。曇り空に覆われて、雨に濡れた街並は薄暗く、すでに夕暮れが兆していた。

解放路からはバスに乗って、汽車站へ。

汽車站の近所に市場があったので、アーケードをひとまわりした。果物や日用雑貨、衣類など。梨三個（二・四元）を買った。

售票処前に出ると、鄧桂元の姿があった．昨日のように、あるいは三日前のように。何をするということもなく立ちつづけて、旅社の客待ちをしていた。

僕は彼女の隣に忍び寄って、トントンと肩を叩いた。

二人、並んで迎興旅社へと帰っていった。

※

五月一八日（火）朝。

ナップサックに荷物を積め込んで、階段を降りていく。

帳場にいた主人に、

「謝々、再見」

と告げて旅社を出ようとすると、鄧桂元が顔を洗っていた。

「行くの？」

と彼女はそっけなく言う。

「うん」

僕もそっけなく答えて、振り返らないままバス停へと向かった。

ちょうど通勤の時間帯だからか、バスは混雑していた。手すりを握りしめて、雨上がりの衡陽を眺めていた。

朝の繁華街（解放路）の情景が視界を流れていった。ホテルや百貨大楼、そして苦労させられた中国銀行の支所。

ふと、見覚えのある女の子たちの姿が視界を過ぎった。間両替の女の子たち。また一日が始まって、披女たちはまた今日という一日を両替の客を待つのだろう。

僕は満員のバスに揺られながら、あるなつかしい場所から確実に離れていくのだと感じていた。なつかしい場所から一歩一歩確実に離れていくということ。それはもしかしたら旅ということだけではなくて、生きるということそのものが実はそういうものでしかありえないのではないかと、僕は思う。

この衡陽の街に来て以来何度か空想した思いが、再びある重量をもって立ち上がるのを、僕は感じていた。それはこのまま旅を中断して衡陽に留まるということ、衡陽に暮らすということ、あるいは衡陽を中心点として、いつも衡陽に戻ってくるものとして旅を構成するということだ。その空想は決して非現実的なものとは思われなかったが、僕の旅を衡陽というひとつの安定点に落ち着けるということであり、旅を終えるということに等しかった。

僕はまだ旅を終えるわけにはいかないのだ、と僕は自分に言い聞かせた。

もっと遠くへ。〈寂しさ〉の方位へ、と僕は思う。その意味が分かっているわけではなかったけれども。